



昭和46年(1971年)

6月号 (No. 312)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

本文

山で覚えたパイプの煙り……………	1
集会委員会年度計画……………	1
年次晩餐会覚え書……………	2
年次晩餐会一覽表……………	2
相模野基線の近況……………	3
ああ深田久弥先生……………	3
同じ手紙が三ヵ所に……………	3
マカルー1970年……………	4
第9回この一本展の解題（下）……………	5

図書室便り

圖書受入報告	6
定期刊行物受入報告	6
地圖受入報告	6
圖書委員會報告	6
山岳創刊號復刻	6

會務報告

昭和46年度通常会員総会	7
三田会長あいさつ要旨	7
昭和45年度事業報告	7
昭和46年度事業計画案	8
深田氏追悼会	8
春期支部長会議	8
5月理事評議員会	8
台湾山岳協会創立25周年大会	8
昭和46年度学生部便り	9
会員異動	9
ルーム日誌	9

その他

エベレスト国際隊南壁を断念……………6
藤島支部長重傷……………10

山で覚えたパイプの煙り

柿原謙一

学生時代に山岳部の友人とパイプタバコを吸いはじめた。アルプスの頂を眺めてパイプをくゆらしているガイドの写真、山岳書のカットにあるパイプのスケッチなどをみてそのスタイルや

暗い永い戦争時代がつづく。敗戦後しばらくして外国製のパイプタバコが手にはいるようになって、パイプの煙りは戦前の自己流の味を再現するにすぎなかった。

昭和四十一年の十月、先輩三名とと

たので、こうやるのだそうだがいいなかった。このように、自己流に吸ったぐらいでだから味の方は写真やスケッチからうけるムードとは大違いで、からくて舌は荒れる、ボールが焼けるように熱くなった、火がすぐに消えたりする。タバコの詰めかたが肝心なのだと云われても、要領程度が判らず、今にして思えば固くつめたりゆるすぎたりで、適度の詰めかたをやっていたらなかった。

このように雁坂峠から甲武信岳に登る。このとき藤島さんから日本山岳会への復活入会をすすめられた。藤島、村尾の御入会を、おいしそくにパイプの煙りをおくゆらせている。甲武信岳の三角点であった秋の日ざしが灼けるようにあつかった。スタイルムードに魅力があつたパイプは、どうも味もおもしろいらした。これがこの山行での収獲の一つであった。若いときから胸に宿っていたパイプへの憧憬が、ふたたび旺盛になつてきた。しかし味がどうも感心できない。結局シガレットを吸う。

結局シガレットを吸う。

そんな次第だから、煙草の味はシガレットが良い、ムードはパイプだ、といった二刀流となり、さっぱりパイプが物にならぬまま、学校を卒業した。

昭和四十四年の九月、戸台から仙丈を往復しての帰りに、村尾さんのくゆらすパイパの香りが、戸台川の林のな

かで道一杯にひろがり、あとから歩く私は鼻をクンクンさせた。しかし私の吸うパイプタバコの味は、やはりむかしどおりで、どうにも魅力に乏しいのである。

本年一月下旬、村尾さんから大谷丸・瀧子山への旅に誘われた。藤島・村尾・小生と長男の四人で、田野の石里館に泊る。その夜のことである。私はじめて藤島さんから、伴持参のバイプで本格的にバイプタバコの吸いかなたを、文字どおり手にとって教えられた。

つまり、詰めかたと吸いかたなのである。学生時代にある程度堅くつめるもの、と聞いていたが、その程度が全然なっていないかったのである、藤島さん、下疎上密に詰めることとフカフカふかすな、と教えた。タバコを詰めてくれてから火をつける前にまづ吸ってみよと云う。自然に空気が口腔に至る。火をつけてからもまた然り。しばらくしてボールの中の灰煙を少し押す

パイプの調子は、あたかも銀煙管でござい煙草を吸ふときのあの自然さと、全く同じであった。これが本当の調子だよ、と藤島さんはいう。パイプをはじめてから三十五年もたつて、私ははじめて本格的に柔かい自然さでパイプ

をくゆらすことのできる要領を教えられた。そしてこれまでの疑問と云うかかかれた。不自然さが一気に氷解する想ひがした。この調子ならば、スタイルもムードもそして味も、一つのものにまとま

っている。なるほどなあと、私は三十五年を凝縮した感嘆の紫煙をくゆらすこととなった。同行した長男が、若くして本調子を覚えたことは申すまでもない。山峡田野の夜は更けた。

翌朝は快晴の曲沢峠に向い、雪をふんで大谷丸・滝子山にいたり、初狩駅に降った。駅について列車をまつ間にも一度手ほどきをうけた。初狩駅で詰めたタバコは、八王子駅までもっていた。これでパイプへの夢が本物になった、と反省した。

「山に忘れたパイプ」の著者は、私にまさに三十五年目に「山で覚えたパイプの煙り」の火をつけてくれた人、ということになった。混勿山の旅、楽しき哉。

集会委員会年度計画

本年度集會委員会は「より多くの會員がより多くの集まりに参加する」こ

とを方針として次のような年度計画をたて、集会委員一同全力投球するに
してあります。日本山岳会らしい有
意義な集会にしたいと思ひます
ので、会員各位の絶大な御協力を願
いすると同時に、万障お繰りあわせの
上各種集會に御出席下さるようお願い
申し上げます。

① 定例集會（そのたび連絡する）従
来通り、遠征隊などの報告会を開く。

② 月例会（毎月十五日とする）
毎月十五日を日本山岳会デーとして
會員相互の親睦、交流をはかること
にする。六月以降の日程は次の通り決
定した。

- ・六月十五日（火）スケッチ教室
- ・七月十五日（木）スケッチ教室
- 山里寿男氏を招き山のスケッチを基
礎から勉強する。
- ・八月十五日（日）現地小集會、奥
多摩教馬部落「山崎家」で懇親会を開
く。ご家族づれ大歓迎。
- ・九月十五日（水）敬老の祭日、日
帰り山行を計画。
- ・十月十五日（金）ヒマラヤ遠征に
関する実務についてのレクチャー。
- ・十一月十五日（月）西ク震説會員
を先生に招き、山の歌教室を開く。
- ・十二月十五日（水）恒例による忘
年会をルームで盛大に開催する。会費
五百円。プレゼントを持参のこと。
- ・一月十五日（土）十六日（日）八
万尾根スキー大会。

③ 講演と映画大会

- ・七月十三日（火）国際エベレスト
隊員植村、伊藤藤氏の帰国報告会（六
時、九段会館）入場料三五〇円。

その他詳細はあらためて会報誌上で
ご連絡いたします。不明の点は本会事
務局にお問い合わせ下さい。會員全体
の楽しいよりどころの一つとしてやっ
て行きたいと思ひます。會員各位の御
意見を寄せていただければ幸いです。

昭和25年、45年度年次晩餐会一覽表

年	月日	場 所	出席 人員	摘 要
昭和25	11・24	神田YMCA	58	名誉会員招待晩餐会 世話人―藤島・神谷・成瀬
昭和26	11・30	同 右	60	会報で年次晩餐会と記された最初 世話人―神谷・成瀬
昭和27	11・21	同 右	60	有志晩餐会と会報一六五号に記され未だ 不徹底。世話人―石原・加藤
昭和28		虎ノ門 東京クラブ		
昭和29	11・25	同 右		創立五十周年記念講演・晩餐会が一月 二十六日国際文化会館で行なわれたので 年次晩餐会としてはやらなかった模様。
昭和30	12・15	駿ノ上ホテル	68	
昭和31	12・2	日本橋 協和会館	95	(会報に記載なく「山岳」による)
昭和32	12・12	新丸ビル地下 ポルスタ1	108	(出席人員は会報では九〇、「山岳」で は一〇八)
昭和33	12・10	国際文化会館		(会報に記載なし「山岳」による)
昭和34	12・6	茗溪会館	72	司会―藤島
昭和35	12・1	同 右	96	司会―藤島
昭和36	12・25	同 右	134	司会―藤島 「この一本展」今回よりはじまる。
昭和37	12・3	同 右	169	司会―藤島 「この一本展」志賀重昂氏関係
昭和38	12・2	同 右	155	司会―深田 高野鷹蔵氏の遺品展示
昭和39	12・3	有楽 三井ビル8階	178	司会―深田 「この一本展」―槍ヶ岳
昭和40	12・2	八芳園	183	司会―加藤 「この一本展」
昭和41	12・1	新宿伊勢丹 8階プリムラ	209	司会―成瀬 「この一本展」―明治百年
昭和42	12・6	平河町 マツヤサロ	195	司会―加藤 「この一本展」
昭和43	12・5	同 右	223	「この一本展」―エベレスト
昭和44	12・12	同 右	222	「この一本展」

年次晩餐会覚え書

望月達夫

本会の行事や催し、或いは出版物の類いは、会の創立当時から連綿と続いているものも少なくないし、それが会の伝統を維持する、ひとつの具体的な現われともなっているように思う。しかし戦後、会が行なってきた行事のなかには、戦前にまっただけなかつたものもいくつ数えられる。今日、多くの会員に熟知され、歓迎されている年次晩餐会のごとき、まさにその尤たるものであろう。

年次晩餐会が定着してから、わずかに二十余年にしかならぬのだが、では何

(注)一、昭和四十年(一九六五)十月

十四日創立六十周年記念祝賀会の席上、新たに推薦した名誉会員を公表したことが例となつて、昭和四十一年以降は、毎年の年次晩餐会の席上で、新名誉会員ならびに新永年会員を公表することが恒例となつた。

二、この表によると、藤島敏男氏の

司会は一九六〇～六三年の四回にすぎないが、それ以前も殆んど同氏の司会が多く、余り同一人ばかりはいけなさと、自ら固辞して交替したいきざつがある。

三、この表は主として会報に拠つ

てゐる。プランクの箇所は私の調べた限りでは会報、「山岳」で不明のところである。昭和二十八年から三十年位のところが判らない。ちょうどマナリス登山に会の主力が向けられていた期間である。

年からこれが始まったかと聞かれて、即座に答えられる会員は殆んどあるまい。おしなべて、事のおこりはそうしたものだ。後世史家のため、いささか調べたところを記しておきたい。昭和二十年五月二十五日夜の東京爆撃により、かつて虎ノ門不二屋ビルにあった本会のクラブルームは、一切の所蔵品もろとも烏有に帰し、敗戦後の本拠は昭和二十四年三月、お茶の水の旧体育会敷地内に会自身の建物を持つに至るまでは、極めて不便な状態をしのげねばならなかった。従つて役員会以外の食事を共にする会なども、当時の不如意な食糧事情と相俟つてほとんど行なわれなかつた。

その頃、思い出されるのは、今はなき雲南坂の松方邸における有志の懇談会であつた。たいがい正月頃、各自何程かの会費をもちより、スキ焼を共にして懇談したことであり、会の有志晩餐会などが始められるまで数年は続いたように記憶する。偶々会報一四一、一三三頁に、昭和二十三年三月二十二日、松方邸、有志懇談会として、横氏ほか十八名の出席者の記載をみるが、多分これもその会の一つであつたはずだ。

また偶然私のところに、昭和二十六年一月二十一日、松方邸での新年会出席者の記録が残っているが、順序不同でそれを記すと、松方、横、三田、成瀬、田辺、谷口、外山、村山、堀田、神山、千谷、松方(峰)、佐藤(久)、藤島、関根、今村、村木、梶川、山田、林、望月の二十一名である。

松方さんならびに御家族の方々に、當時を偲んで感謝の念を新たにしたいものは、なかつた。

お茶の水の会自身のルームが昭和二十四年三月落成したのを機に、前年十二月遷された小島島水氏の追悼展覧会を同年三月二十六日から三十一日まで新ルームで開催した。そして二十六日(土)午後六時から追悼小集会も行なつた。たしか、その頃新ルームで戦後、会として初めての有志晩餐会と云つても牛肉を買つてきて七輪の炭火でスキ焼をやつた記憶がある。それは展覧会の直前だからに思うが、手許の資料では目下明らかなでない。

ところが、会報一五三九ページのTF氏(藤島氏)の記すところによると、二十四年十一月二十三日、クラブルームで戦後初めての有志晩餐会が開かれたように書かれているから(ただしその時の記録は残念ながら会報にも見当たらないが、前の記述は私の記憶違いで、これが本当の戦後最初のものかとも思うが、たしか同年三月頃にも、スキ焼をやつたように思っている。ルーム図書室の書棚にまだ殆んど図書が入っていないところで、二十数名が写した写真があるのがそれだと思つた。

それはとも角として、つづいて翌昭和二十五年十一月二十四日には、名誉会員招待晩餐会というのを神田YMCAでやつた。その記録が会報一五三三号に載つてゐるのをみると、そこになかなか年次晩餐会は「アルバイ・クラブの文字がみえる。」「アルバイ・クラブの年次晩餐会は十二月だというのが、師走に入ると、なんとなくザワザワ落ちつかぬ日本では、十一月あたりがいいかと思う。偶然、昭和二十四年十一月二十三日はクラブルームで戦後初めて有志晩餐会を催し、それからちょうど一年で今次の集りであつた。或いはこれが恒例のアニヴァーサリー・ディナーになつてもよいであらう。」筆者はTF氏。ちなみに当日の出席者は五八名。関係記事は「山岳」四十五年一八一頁にもある。アニヴァーサリー・ディナーのことは

思い出せば、松方邸の会合の折にも、われわれはしばしば口にしたことがあった。

ついで翌昭和二十六年は十一月三十日に同じく神田YMCAで行なわれ、出席者六〇名。「年次晩餐会」という標題のあるその記録には「昨年から始められた本年年次晩餐会が……」（会報一五九号十二ページ）と冒頭に記されているところから考えると、二十六年ろすではつきりしているし、前年の名誉会員招待晩餐会も、なかば年次晩餐会という意識でやったことが、叙上の記録からみて少々はつきりしてきた。

以上のことから戦後、本会の主要行事の一つとなった年次晩餐会は、昭和二十五年十一月二十四日、神田YMCAで開催されたものを嚆矢するといっておて差しつかないであろう。資料の見落しが、或いはあるかも知れない。御

相模野基線の近況

建設省国土地理院の前身、陸地測量部が、日本全国の地図を作るにあたり麻布台（東京都港区麻布飯倉三丁目一八番地）の旧天文台子午環の中心点を「日本経緯度原点」

・緯度 北緯三五度三九分一七秒五・四八
・経度 東經一三九度四四分四〇秒五〇二〇

・原点方位角（原点を通る真北線から右まわりに鹿野山一等三角点までは、高七四・八mの「座間の一等三角点」がある。これら基線の両端は、五万分の一地形図の八王子図幅と藤沢図幅に夫々明記されている。
私はここ十年来、この基線に近い町田市に住んでいるので、今年の成人の日の午後、この基線の両端点を探訪した。

異論のある会員の御叱正を賜りたい。なお比較的新しい会員諸氏のために、戦前は年次晩餐会のような、多くの会員が一堂に会して食事を共にする会合はなく、有志晩餐会の名のもとに主として役員・常連、古参員が集る会が年二、三回あって、当時まだ新参者であった私など、近よりにくかったことを付言しておきたい。その点では会は大変よくなったと思っている。また調べついでに現在までの年次晩餐会を表にしてお目にかけることとする。

ああ深田久弥先生

川北 仁

深田先生が亡くなられた。うそのような話である。三月二十一日夜九時のテレビで伝えられた悲報を翌二十二日の朝刊で確かめようとしたがあいにく

基線があるが、この方は余りに知られていないのは遺憾である。三角測量は三角法の正弦の方則（三角形の内角と一辺とを測定すれば他の二辺は計算によって知りうる）によるもので、このように鋼製スケール等で直接に測定する線を基線というのである。

旧陸地測量部は、相模野原に五二一〇mの基線を定め、これを「相模野基線」と名づけて、日本全国の三角測量の基線にしている。

相模野基線の北端点には「下溝の一等三角点」と称される標高九七・〇mの一等三角点があり、南端点には、標高七四・八mの「座間の一等三角点」がある。これら基線の両端は、五万分の一地形図の八王子図幅と藤沢図幅に夫々明記されている。
私はここ十年来、この基線に近い町田市に住んでいるので、今年の成人の日の午後、この基線の両端点を探訪した。

休刊日、新聞社に電話したところ事実だという。深田先生に初めてお目にかかったのは昨年十二月山岳会の年次晩餐会の日である、何度もお便りを頂きお招きを受けたのでノコノコと世田谷のお宅へ伺いその足で山岳会に向いたのは三時半だった。よく来たね待っていたよ。これがお目にかかった最初のお言葉であった。

想像していたより少し老けた感じではあったが終始にこやかな表情で一片の気取りもなくおだやかに話されるお顔を眺めて一安心、中折を無難作におぶられた先生の同伴をすし詰の超下鉄を乗りついで赤坂見附まで、折から週末のことと地下鉄はすし詰の超満員先生と体をくっつけたまま身動きもならぬ車内ではあったが色々のしいお話を伺うことが出来た、あッという間に過ぎてしまった。「きたぐに」の

(1)座間の南端点
小田急江の島線南林間駅から駅前の中央通りを西へすすみ、舗装の終った地から、なお暫くいったところの左側、佐藤ゴム工業所の隣りの杉の植林中に、この三角点を見つけたことができた。隣にはゴム工場の機械がゴゴゴと音を立てていたが、三角点の周囲には柵が作られており、大事に保護されていた。

(2)下溝の北端点
昔は下溝村といっていたこの付近も今は相模原市の新興住宅地である。五万分の一地形図で見当をつけて訪れた場所の近くは、養鶏団地が多く、右も左も養鶏場であった。しかし近所の人に三角点の位置をたずねてみても知っている人がおらず、それを見つけたには随分と時間がかかった。やっと近くにある古いお寺、源信山願正寺の住職に教えてもらって、日没の寸前に漸やく三角点を見つけたことができた。

扉の顔写真よく撮れてましたね、といったところ、そうかね、そいつは嬉しいと破顔一笑され某紙の批評子が深田に東京罵倒論を書かせたといっていましたとつづると、ウンウンと上を向いてうなづいておられたことが思い出される。

東急プラザ前の長い歩道橋を大股に歩かれる先生をみてさすがに山できたてあるなあーと感心してながめたものである。晩餐会の帰りまた世田谷のお家へお邪魔する町になり、井ノ頭線を下り静かな屋敷町を先生と、二人でコソコソと歩いた印象は今もってあざやかである。奥様にも散々無理をいって辞去したのは十時過ぎだったろうか。今度は名古屋でいや東京でとお目にかかれる日を楽しみにしていたのに四月月後の今日思いがけない悲報に接して茫然としている私、最初の面接が

しかしその三角点は宅地造成の土盛り工事により半分埋没しかけている状態なのは、二度びっくり、遇々出会った隣接する民家の人にたずねてみて、境界線のことと調べにきた不動産屋と間違えられる仕末。僅かにこの三角点と五〇cmの距離で塀が接している、相模原市麻溝二〇一番地の山本さんだけが、この三角点の重要性を認識していたので安心はしたものの、宅地造成のため三角点を埋めるまで土盛りしているのは、隣の地主さんであるのでどうしようもないとのことであった。

立派な地形図ができてしまった今日或いはもう基線のもつ重要性はないのかも知れないが、日本の三角測量の「基線」の原点を、このように荒れ果ててささていてよいものなのだろうか、折角探してあつた三角点ではあったが、何とも寂しい気持ちで帰途についた。
(46・1・17) (松田雄一)

最後になってしまった一月に母を亡くした今日深田先生の悲報を聞く悲しいことがつづいてやりにきれぬ。私の居間には先生の色紙が光彩を放っている。「北に遠ざかりて雪白き山あり」

◇同じ手紙が三カ所に◇

カナダでジョン・リックというのがいる。彼はアングロス登攀史を見てもわかる通り、かなりそこを歩いており、リマのモラレス・アルナオや、この間日本へ結婚のため一寸帰国した宮下昭君などとも知り合ひだし、AACのカーターとも文通しているらしい。一年ばかり前に私のところへ彼から突然手紙が来た。アングロス登攀史をもとめているからこれこれのことを教えてくださいと、山ほどの面倒な質問をよこした。余りのことに返事を出さなかつたら催促が来た。返せず。

そして今年になった。遂この間のこと、山岳会と会社と自宅へ同文の手紙が三通飛行便で舞い込んできた。今度はさすがに少し改心したのか、質問事項は私が一九六一年に行つた時のことだけ。これなら返事をしてやってもいいと思つてゐる。
日本にも同じような人がいないでもない。いくらか人好くても限度のあることを知るべし。
(吉沢)

山岳索引刊行遅延

山岳二十六年（六十年）までの総索引は五月末出来る予定でしたが、都合により、六月中旬まで発行が遅れました。予約を申し込まれた方には大変申しわけありませんが、しばらくお待ち下さい。まだ予約されていない方も、部数に制限がありませんので本会事務局までなるべく早目に予約して下さいようお願い申し上げます。
頒価は千円（送料、荷造り代として別に二百円）です。

マカールー一九七〇年

(承前)

日本山岳会東海支部

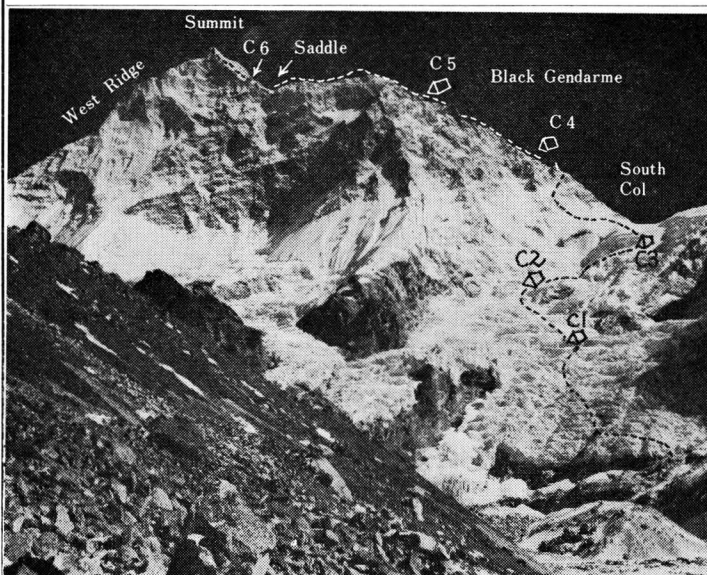
ポーターは全部、村へ下ってしまつた。嵐の山の中に、隊員とシェルバが荷物とともに残された。風雪は四日後におさまった。

三月十四日、峠越えが再開された。雪の稜線のところどころに、ポーターたちのためのロープが固定された。荷物はいったん、峠の近くにデポされ、ポーターは空身で峠の向う側の森林地帯へ移動した。そこから、逆にデポ地へ荷物をとり引き返した。隊員たちも荷物を運んだ。キャラバンの主力が峠を越えたのは三月十七日であった。約三分の一の荷物が途中に残され、後隊にまかされることになった。主力は、一刻も早くベースキャンプ地に到着して、登山活動を始める必要があった。しんがりは松浦と浅見にまかされた。

三月三十日、尾上以下三名の隊員がシェルバ一名、ポーター四名をつれて先行することになった。彼らは、三月二十二日、バルン氷河へ入り、四七〇〇m地点にベースキャンプを建設した。三月二十四日、主力隊が到着し、しんがりをとめる二名の隊員を除く全員がベースキャンプに集った。キャラバンは、三十日間の長きにわたった。ベースキャンプ地はマカールの南面が全部見える明るい谷間であった。

三月二十五日から、アイスフォールの偵察が始まった。中央部に、雪崩からもっとも安全なルートがひらかれた。三月二十七日、アイスフォールの中の五三〇〇m地点にC1が建設された。三月三十日、アイスフォール地帯を抜けた、五九〇〇m地点にC2が建設された。

四月一日には、サウス・コル直下の



撮影白旗

マカールのBCからの

荷あげ計画

キャンプでは

ベース・キ

この頃から

は不足気味

であった。

この頃には、

の隊のシ

ルバの人数

は不足気味

であった。

この頃には、

の隊のシ

ルバの人数

は不足気味

であった。

この頃には、

の隊のシ

ルバの人数

は不足気味

であった。

六五〇〇m地点にC3 (ABC) が建設された。C3の建設までは、非常に早くことが進んだので、四月のうちに頂上へ落せるかもしれないという楽観論も生れた。ところが、C3の上で、ルートは急に困難になった。この稜線上へ出るための急な斜面は、高きからみて、ちょうど強い高度障害にかかる範囲にあった。隊員の多くは、この斜面で高山病にやられて退却した。サウスコルから、直接鋭い岩稜に取りつくことは出来ず、左ヘトラバースしてから稜線へ出るルートが取られた。斜面には全部ロープが固定された。ここからユマールの使用が始まった。

十八日、C3を出た六名の隊員によって、稜線の上で六名の隊員が試登された。岩壁と雪壁の二カ所で登攀が試みられたが、雪壁へ取りついたパーティが稜線へ出ることに成功した。十九日二隊員が、昨日のルートから稜線上を偵察し、ドームの上になりかたいてキャンプ地を発見した。これはテントが十くらい張れそうな、東南稜上の唯一の平らな場所だったが、北(チベット)側は大きな雪庇になっていた。

四月二十四日、ドームの上にC4が建設された。標高七一〇〇mのC3建設から二十三日目であった。C4建設にこんな多くの日数がかかった理由は、第一に、隊員の多くが高山病にかかって進めなくなったこと、第二に、強い西風のためシェルバが動きたがらなかったこと、第三に、第四に補給能力が不充分であったことがあつた。C3 (ABC)までは、短期間に大量の荷あげをする必要があるが、そのためには、この隊のシェルバの人数は不足気味であった。この頃からベース・キャンプでは荷あげ計画BCからの撮影白旗

が根本的に再検討され、精密な管理体制が作られた。C4から上の稜線は、まずたいして問題のない雪がづき、その先にむつかしいナイフ・エッジが現れ、つづいて最大の難所であるブラック・ジャンダルムの岩壁がただだかっている。C4から見たブラック・ジャンダルムについては、最初、やさしいという報告が入った。しかし、実際には、十七日間の悪戦苦闘の末にやっと突破された。この間強風がつづいた。五月十一日、快晴無風の中で最初にブラック・ジャンダルムを越えた、田中、尾崎の二人は稜線の上に小さな岩穴を発見し、そこにC5をつくった。ロープは岩穴の中にまで張られた。翌日、二人は八〇〇〇mピークを越え、サドルまで行った。C6はここに作られる予定になった。C4からサドルまでのルートは、困難な上に非常に長く多くのシェルバはブラック・ジャンダルムで動けなくなった。サドルに着いた二隊員は、北側の氷河からその地点にはらくに到着出来ることを発見した。原隊長は、C4の川口、後藤に北側の氷河を偵察するように命じた。二人は、C4の上部の雪稜がナイフエッジに移行する部分から、北側の氷河へ下るルートを作り氷河へ下りた。氷河を偵察した結果、二つのことが判った。第一に氷河を通ってサドルへ行く方が、ブラック・ジャンダルムを越えて同じ場所へ行くよりはおるかにやさしい。第二、氷河から反対側の東縁へは、かなりらくに登れそうでも、もし東縁にルートをかえれば、最後の登りは東南稜よりずっとやさしくなるのではないか。しかし、第二はあくまでも推測であった。偵察の結果、戦術を変更すべきかどうかという問題が発生した。五月十三日、BC・C4・C5の間で、無線を

使ってこの問題が検討された。上部の隊員の意見は、変更すべしというものと、分れ対立した。すでに五月八日から、無風快晴がつづいており、モン・スーンが始まりかけていた。東南稜に固執すれば、失敗の可能性が強まるかもしれない。ルートを変更して東南稜を登る、という決断をした。そして、この先、荷あげのルートとしては、ブラック・ジャンダルムを越すことはやめて、氷河上のルートを使うことになった。五月十五日、この氷河上の七三〇〇m地点にC5が作られた。五月十八日、C5を経由した、川口後藤は二名のシェルバとともに氷河側からサドルに上がり、そこから百mくらい稜線上を頂上側へ登ったところにC6を建設した。標高は七八五〇mであった。ところが、ここで、二人の持っていた無線機が故障するという思わぬ事故が発生した。五月十九日と二十日の二日間、二人はC6から頂上へ向う岩壁のルートを試登し、約八一〇〇mまでロープを固定した。下のキャンプでは二人の行動について、まったくわからなかった。十九日にC6へ入るためにC5を出発した二人の隊員は不調のため引き返した。川口隊は下から交替要員が来ないので二日間つづけてC6から上の試登とロープの固定を行ったのであった。補給が間にあわず、二十日になっても、下からは誰もC6へ上ってこなかった。すでに十二日前からモン・スーンが始つており、毎日雪が降っていた。BCと連絡のとれない川口は自分だけの判断で、明日頂上をアタックする決心をした。五月二十日、午前四時三十分二人

は酸素ボンベを一本づつ背負ってC6を出発して頂上へ向った。八三〇〇m附近で二人の酸素は切れ、そこから先は酸素なしで登りつづけた。午後からは天候は悪化し、頂上稜線では強い風が吹き、雪が降っていた。午後六時四十五分まで登りつづけた彼らは、頂上直前まで迫っていたが、疲労の極限に達していた。先頭の川口は、三〇〇mくらい先に、頂上らしいピークを見た。しかし、彼は、いくつかのピークにだまされて来たので、それが頂上であるという確信が持てなかった。そして、それ以上の前進を断念して、引返す決心をした。川口隊の引返し地点は八四〇〇mを越えており、目前に見えたのは頂上であった。二人は八三〇〇mまで下って、稜線上に雪穴を掘ってピバクした。川口は、幻崎の中で仲間達を見た。一方、田中は、尾崎の二人は同じ日にC5を出発し、ひどい風の中を夕方C6へ着いた。そして、川口と後藤の行方不明がBCへ伝えられた。その日の夜、川口と後藤はC6へ帰らなかつた。BCでは、二人はほぼまちがいがなく、遭難したものと判断した。その夜は全キャンプが沈みきった気持になった。

五月二十一日、田中と尾崎はC6から上部のロープの固定状況を調べるためと、帰って来ぬ二人の模索のために上へ登った。そして、のろのろと下ってくる二人に行き会った。二人は、午後六時三十分田中、尾崎に助けられてC6に収容された。

おなじ日、市川と浅見はブラック・ジャンダルムを越え、C5からC6へ向いつつあった。このチームは、東南稜を完全にたどって頂上へ行くことを通らずにC6向っていた。彼らは深い雪に苦しみ、夜の十一時にC6へ着いた。こうしてその夜、C6には六人の

隊員が集った。

C6の酸素ボンベは三本(AMP)しかなく疲労こんぱいの川口、後藤の睡眠用に一本使用させたので二本しか残っていなかった。C3に下ったシェールバたちは力を出しきって、これ以上補給する能力はなかった。C5とC4には食糧も燃料もほとんど残っていなかった。BCの判断では、アタックのチャンスは明日一日しかなかった。全隊員が明日の晴天を祈った。

五月二十三日田中、尾崎は約一時間の仮眠のあと、二時三十分酸素ボンベ一本づつを持ってC6を出発した。市川と浅見が彼らの出発の世話をした。幸運な快晴が訪れ、マカルーは満天の星空につつまれた。二人が頂上へ登って行くこの日、下では、雪盲になった川口と後藤の救助作業が開始された。C5から、生田とミンマ・ツェリンとラクパ・ツェリンが登り、目の見えないう二人をC5へつれて下った。C4の越山は、アン・ニマをつれて、一日でC6まで登り、酸素二本と少しの食糧をC6へ補給した。C3からは吉原、カルマ、ドルジェが救援の目的でC4へ入った。

頂上へ向った二人は、午後五時、八三〇〇m附近で岩場の最後の部分に近づいた。ここで酸素がなくなった。二人は毎分一・五リットル吸っていた。そのあとは酸素なしで登りつづけた。午後七時十分頂上に立った。彼らは月明りの中を下り、翌二十四日、午前三時三十分、C6に帰った。市川と越山は二度目の登頂の準備を待っていたが下のキャンプラインには、物資はなくなっていた。天候は崩れはじめた。Bは全員に撤収を命じた。

おわりに

登山期間は、BC建設から撤収まで六十九日の長きにわたった。登頂は、

予定より二十三日おくれた。計画では六人から八人の登頂者は予定していたが実際には二人にとどまった。結局この登山は、未踏の八〇〇〇m峰を越えてから、いったん下り、再び八四八〇mへ登るというヒマラヤにおける縦走であった。困難なルートに加えて、東南稜が十km以上の長さであったことが補給をむずかしくした。BCでは、荷あげの管理に大変な労力が費され、松浦、尾上が上へ登らずに、この任務にあたった。

五月八日から六日間の快晴無風があったが、この間には登頂出来なかった。登頂は、モンスーンが始ってから、幸運な晴天をつかんで、はたされた。固定ロープは五〇〇〇m使われ、荷あげにはユマールが威力を発揮した。靴は、西ドイツ製の三重靴を使用した。

酸素の使用本数は百本で、主として睡眠中のみに使われた。二十五名というシェールバの数は不足気味で最低三十五名くらいの方が良かった。隊員十六名は、少し多すぎた。十名から十二名くらいが適当であったといえよう。この成功は、隊員たちの超人的な努力と、鉄の団結と、そして幸運とのためのものであった。(原・浅見)

第九回この一本展の解題

(下)

『F6 峯 登頂』

F6なんて山、聞いたこともないね。一体どこなんだい? そして登頂したものは誰だい?——と、この本の表題に目をとめる方があった。実は私の出陳目的は達せられるというわけだ。「この一本」で「一本取ろう」というのが、私の魂胆だったからです。

K6ならチヨゴリザ峯の旧測量記号のようですが、F6なんていう山は私も知りません。この本に出てくるF6は、実は詩人の創作した山名なのです。The Ascent of F6は詩劇の脚本で、一九三六年にロンドンで発表され、翌年上演されて、かなり高い評価を得た。作者のW・H・オウデンとC・インチャーウッドは、ともに英国生まれで早くから、その才を認められた人たちが、のち米國に帰化した作家活動をつづけて、この劇のような共作を他にいくつかあります。

この本、現実の登山記ではないにせよ、登山という行為に文学的な批判を加えている点では、Alpine Literatureのなかに入れてもあながち場ちがいはないかもしれない。英國のある植民地の国境上にそびえるF6を、国家的威信をかけて登ろうとする登山家たちを中心とし、悲劇的なシチュエーションの描写、側面からの風刺的な批判などを織り混ぜた高度な文学作品ですが、詩劇なので私などには理解しにくい難しい面を持っています。座興に並べたりしては、著者たちに気の毒かも知れませんが……。(島田 隼)

チベットの大きな本と小さな本

チベットへ最初に入国した外国人は十七世紀のイエズス会の神父たちであったが、近世で最初の人はサムエル・タナーであった。一七八三年インドからチベットのテシヨ・ラマ宮廷として派遣されたタナーは、多くの護衛兵を率いて、ベンガルからプータンを通ってチベットへ入った。私たちがその紀行を読むことのできる最初のヒマラヤ横断記であった。その報告書は旅行後十七年目の一八〇〇年に出版された。

Samuel Turner: An Account of an Embassy to the Court of the Teshoo Lama, in Tibet.

これが私の言う「チベットの大きな本」である。二六×三二センチ、四七三ページの堂々たる本である。洪茶色の革表紙に本文もたっぷり余白を取った組み方で、いかにもヒマラヤ古典と言わふにふさわしい。近藤等氏の旧著「ヒマラヤ」の中にこの本に触れて「早大図書館の秘蔵本となっている」と書かれているくらいだから、もちろん私の蔵書中の珍宝の一つである。

私が「チベットの小さな本」と言うのは、Frederic Shoberl(Ed.): Tibet and India beyond the Ganges, London, 1823.

であって、九×一三センチ、日本の文庫本よりも小さい。三五二ページ、一八二三年の発行だから、やはり珍重すべき古典であろう。

おもしろいことには、この大小二冊のチベットの本は、その革表紙の色と違い、表紙には文字を入らずただ細い金の枠で囲んである点と、金で擦した背の模様や文字と言、三方の小口の雲彩と言、目次や本文の活字の組み方と言、大小の差はあれ、全く同じ体裁である。

即ち知る、この小さな本は大きな本をわざと模倣したものである。そしてその中味もチベットに関する記事はタナーの本から引いている。

山岳総目録

(深田久弥)

この度長年の懸案であった日本山岳会機関誌「山岳」の総目録(創刊から六十三年までの目次を集録したもの)をまとめてみました。これは山岳及び山書研究の資料調査の一助としてまと

めたものです。

現在山岳及び山書研究に心しようとする時、見逃すことの出来ないのが「山岳」であり、またこのような文献及び資料調査はもっとも苦とする所です。

特に今日のように「山岳」の入手困難(初期のものでは不可能に近い)を見る時、せめて目録だけでもあったらと痛感し、一冊二冊手にし目を通して(一二冊)完成したのがこの「山岳総目録」です。

暇をみては(約三年)一冊二冊手にして見る「山岳」それは正に日本近代登山史でもあります。(後藤 伝)

国書室 便り

昭和46・4

図書受入報告

日本放送出版協会寄贈

(1)孫野長治著『雲と雷の科学』(NHKブックス94)昭和46

(2)NHK特別取材班『秘境ニエギニア』昭和45

(3)木村征男著『南極越冬新聞』ビックス昭和46

スキージャーナル社寄贈

(1)スキージャーナル編集部編『すばらしき冒険野郎 三浦雄一郎』昭和45

(2)スキージャーナル編集部編『雪と氷の記憶』昭和45

(3)瓜生卓造著『雪の軌跡』昭和46

(4)深田久弥著『雪山の一週間』昭和46

山と溪谷社寄贈

(1)五百沢智也著『登山者のための地形図読本』昭和45

(2)小松山賢二著『日本の蝶』(山溪カラーガイド42)昭和46

(3)中川十二著『旅行やぶにらみ』(山溪新書7)昭和46

築地書館寄贈

(1)小林国夫著『日本アルプスの自然』昭和35

(2)高須茂著『新稿創刊号—登攀ルート解説—』昭和33

あかね書房寄贈

(1)池田錦重編『白い秘境—グリーンランド探検記—』昭和46

新教出版社寄贈

(1)岩村昇、岩村史子著『わがふるさとネパール』(ネパール通信2)昭和45

内藤敏男氏寄贈

(1)内藤敏男著『エベレストへの道—NHK海外取材班—』

定期刊行物受入報告

【部会・会報】

(1)広島山の会『山毛樸林』No. 170~175 (45-11~46-4)

(2)兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』No. 47 (46-4)

(3)国立公園協会『国立公園』No. 255, 256 (46-2-3)

(4)京都山岳会『京都山岳』No. 532 (46-4)

(5)長野県山岳総合センター所報『(1970-4)』

(6)奥多摩山岳会『O.M.C.レポート』No. 254~257 (46-1~4)

(7)低山を歩く会『低山』No. 67~70 (46-1~4)

(8)『登歩溪流会会報』(45-11~12)

(9)『都岳連通信』No. 6

(10)日本山岳協会『登山月報』No. 24 (46-3)

(11)横浜山岳会『山』No. 466 (46-4)

(12)日本登山協会『山と雪』No. 156 (46-4)

【雑誌】

(1)『アルプ』No. 158 (46-4)

(2)『地図』No. 33 (46-3)

(3)『岳』No. 287 (46-5)

(4)『山と溪谷』No. 392 (46-5)

【その他】

(1)慶応義塾体育会山岳部『パンジャブ・ヒマラヤ登山計画71』

(2)福山山岳会創立五十周年記念『登山と人生』慎有恒

(3)東京農業大学『パンジャブ・ヒマラヤ登山隊計画書71』

(4)『自然と文化を訪ねて』(法政大学訪華観音ワンダーフォーゲル隊計画書)

(5)電気通信大学山の会『カンチエント(マカルII)学術登山隊計画書』

(6)『東北大学クニエ遠征報告』69

(7)『富山県自然保護協会報』No. 47~50

(8)六峰山岳会『韓国雪岳山登山報告』

(9)『立教大学ヒンズークシユ・カラロム学術調査隊』

(10)つくし山岳会『ボルネオの山旅—一九六八年キナバル登山隊報告書—』

Journals Arrived in April 1971

1. "Die Alpen", No. 3 März 1971.

2. "Die Alpen", Jahrgang 47, Quartal 1.

3. "Alpinismus", 1971-3.

4. "Appalachia bulletin", Vol. 37, No. 3 March 1971.

5. "Der Bergsteiger, Jahrgang 38, 1971-3.

6. "Österreichischer Alpenvereins, Mitteilungen", Jahrgang 26, Heft 1/2, January February 1971.

7. "La Montagne et Alpinisme", Année 96, No. 80, December 1970.

8. "U. I. A. A.", No. 43, Février 1971.

地図受入報告

1. "Garhwal-Himalaya-West", 1:150000.

古沢一郎氏寄贈

図書委員報告

四月二十七日(火)午後六時三十分(ルーム)

岩間、雁部、斎藤、武田、大橋、村石、野上。

一、『山岳』創刊号の覆刻の件

委員会では覆刻に決定。

二、本年度の総評

イ、行事はほぼ予定通りに実行された。

ロ、図書室にある学生部の書類は、会議室へ移してもらうようにする。

ハ、英文タイプライターは五月に購入する。

「山岳」創刊号復刻のお知らせ

「山岳」は本会の機関誌のみならず日本の登山史、山岳関係の主要な記事

を網羅した貴重な書物であるが、特に明治三十九年の創刊号よりの初期のものは発行部数も少なく、古書界でもほとんど見ることが出来ない現状である。

最近会員の間から「山岳」の初期の号を復刻してほしいという要望が強く

本年中に図書委員会出版することにした。出来るだけ原本の味を出すよう

苦心しており、特に表紙の原本のカラ

いを出すのは技術的にむずかしい。こ

にかく試験的に創刊号を復刻してみ

ることになり、希望者は至急書で図書

委員会まで申し込んでいただきたい。

価格は最高でも二千円の見込み。限定

出版の予定、多数の方が申し込まれる

ことを希望します。詳細については後

日の会報でお知らせします。

◇エベレスト街道◇

故深田君のピンチ・ヒッターとして

今度カムジュンまで行った。カトマン

ズからルクラまで飛行機、それから一

日半、エベレスト街道の一部を大部分

馬背、そして危ないところは歩いて、

ナムチエ経由で宮原ホテルまで登って

いた。

ああいうところへ観光ホテルを建て

ることが、ネパールの将来のためによ

いか悪いかはここでは論じないことに

するが、兎に角、あしたの建て方なら

風景を害することはまずあるまい。

われわれが登った時にはまだ完成に

は程遠く、えらく寒い思いをしたが、

タウエチエ、エベレスト、スプツエ、

ロッキン、同シャル、アマイ・ダブ

ラン、カン・タイガ、タムセルクと並

んだ氷雪の山々の大観は、お世辞なく

天下の逸品である。

故成田君のケルンは天気さえ良けれ

ば毎日この素晴らしい景観を眺められ

る丘の平地に立っていた。一行の中の金

沢の人が深田君遺愛の万年筆を、この

ケルンのエベレスト側にうずめて、小

さをしてくれたと思う。四月二十九日

は一日いたので、エベレストの写真は思

う存分に撮れた。

(吉沢 一郎)

国際隊南壁を断念

エベレスト国際登山隊は、ついに南

西壁直登を断念した。英国のドン・ウ

イランズ、ドガール・ハストン両隊

員は五月二十一日、最後の第六キャン

プ(八三〇m)から頂上をのぼった

が、イエロー・バンドを突破できず、

涙をのんだ。

植村、伊藤両隊員は、ウィーランス

とハストン両隊員のサポートとして最

後まで活躍し、ベース・キャンプから

のメッセージによると、日本隊員の努

会務報告

昭和46年度通常会員総会

昭和四十六年度通常会員総会は四月二十四日午後二時から赤坂OAG会館で開催した。

三田会長あいさつ(別項)の後議長に指名され、昭和四十五年度事業報告(別項)越後(藤島玄)富山(石坂信濃)塚本(伊達)山梨(山村)東海(伊藤)山形(後藤)静岡(山本)秋田(柴田)の各支部報告、昭和四十五年度収支決算報告(別項)財産目録(別項)報告、小原監事監査報告があった。

次いで議案一、昭和四十六年度役員として、三田幸夫、吉沢一郎、中屋健一、山崎安治、藤井進平、神原達、松永敏郎、熊谷義信、大森薫雄、宮下秀樹、中島寛、野上成男、丹部雄雄(以上再任)成瀬岩雄、坂下心一、神崎忠男、板倉勝正、村井葵、渡辺節子、鹿野勝彦(以上新任)の二十氏を理事に、山下一夫氏を監事に新任した。

議案二の会長、副会長選任の件は会長に三田幸夫氏を再任し副会長に成瀬岩雄氏を新任、吉沢一郎氏を再任した。

議案三、評議員改選の件は小原勝郎、佐藤テロ両氏を新任。

議案四、昭和四十六年度事業計画案(別項)付議の件、議案五、昭和四十六年度収支予算案(別項)付議の件はともに原案通り可決した。

▽主席者 三田幸夫、金山淳二、鈴木郭之、平沢亀一郎、藤井進平、山崎安治、藤島玄、今井雄二、坂下心一、望月達夫、山本朋三郎、丹部雄、石坂久忠、杉並区役所山岳部須浪敏行、小方全弘、山下久男、吉沢一郎、杉浦一、西野間幸雄、伊藤

洋平、高山忠四朗、村井純一郎、渡部節子、奥山文次、小花朋子、国見利夫、津田周二、荒巻広政、諸岡一、山村正光、小味秀純、後藤幹次、今井友之助、神谷恭、佐藤テロ、林和夫、城谷一誠、加藤泰安、須田紀子、佐藤金一、板倉勝正、堀内寛、田中元、日高信一郎、中島寛、徳久雄雄、横有恒、広羽清、谷口現吉、野上成男、網蔵志朗、伊達篤郎、小栗孝康、村井喜一、伊倉剛三、尹官炳、小倉童子、山口健児、後藤伝、松本熊次郎、小原勝郎、松永敏郎、塚本茂樹、島田賢麻生武治、田村宏明、斎藤平七、柴田均二、宮下秀樹、中河与一、大森薫雄、牧野内昭武、金坂一郎、沼倉寛二郎、関口周也、渡辺兵力、今井喜美子、瀬名貞利、名須川浩(以上79名)

三田会長あいさつ(要旨)

本年三月末で在籍会員は三〇七〇名となった。四十五年度の新入会員は二〇六名であったが、除籍、退会、物故などで九十四名が会を去られ、年度中では一三三名の増となつてゐる。

恒例により四十五年度の物故会員の氏名を申し上げて冥福を祈りたい。

成田潔忠、常盤一雄、河合良成、中田清兵衛、桑原弥寿三、冠松次郎、四方田清、目黒四郎、町田一碧、十亀太郎、中村慶蔵、広田憲治、泉増一、相内武千雄、山畑玄、上田哲典、田辺多聞、永原輝雄、藤本九三、岡崎真一、戸田英夫、高波吾策、篠原進、品川大海、深田久弥、千木良滋夫

ルーム来室者は四十五年度五五三七名、四十五年度は四〇四七名、会費納入率は五十九・八パーセントと昨年より後さらに向上したにすぎず、会として今後さらに考慮すべきことと思う。

四十五年度はエベレスト登頂という大事業があった。会員各位のご協力に對しあらためて感謝したい。エベレスト登山のため会員サービスに若干欠けたところもあるかと思うが、山岳の発行が若干遅れているほか、会報、各種集会など例年通り実行された。

四十六年度はクラブライフの充実に運営の基本を置きたいと考えている。神河内山荘問題も従来と違った観点から積極的に取り組むたい。クラブというものを会員全体とともに真剣に考えたいと思う。四十六年度も会員各位にご協力を願ふことになつて、充実に登山クラブとして、よき伝統を伝えるような運営をしてゆきたいと考えている。

昭和45年度事業報告

一、登山の指導奨励に必要な集會講習会および展覧会の開催

(イ) 集會

四月二十六日、支部長會議(本会)
五月九日、訪日中華登山隊歓迎會(日本青年館)
五月十七、十八日、第二五九回小集會、第八回木暮翁前祭(金山平)
六月六、七日、第二十四回ウエストノ祭(上高地)
六月十日、第二六〇回小集會「グルジャ・ヒマール」登頂の記録」講師葉師義美氏(本会)
六月二十日、第十三回有志相談會(本会)
六月二十六日、エベレスト隊帰国歓迎會(ホテル・ニューオースター)
七月十日、ソウル大OB隊訪日登山隊歓迎會(佐藤)
七月十五日、第二六一回小集會「モソゴール・ハルヒラー」連峰について」講師小沢重男氏(本会)
七月三十日、ヒラリー卿歓迎會(如水会館)

八月十八日、カナダ山岳会ミス女史歓迎會(本会)
九月九日、第二六二回小集會「マカール・東南稜登頂報告」講師市川章弘氏(本会)
九月三十日、第二六三回小集會「エベレスト登山報告」講師松方三郎氏(岸体育館)
十月三、四日、第二六四回小集會現地小集會(富士西湖)
十月二十二日、第二六五回小集會「アンナプルナIII峰登頂報告」講師宮崎英子氏(本会)
十月二十四日、図書交換會(本会)
十一月十日、フランス登山学校コンタミニス氏歓迎會(本会)
十月十五、十六日、第十三回もみじ會(静岡)
十二月十二日、秋季支部長會議(本会)

(ハ) 展覧會
「大エベレスト展」八月一日〜十二日(東京・西武百貨店) 八月七日〜十二日(名古屋・名鉄百貨店) 八月十五日〜二十三日(福岡・岩田屋百貨店) 八月二十五日〜三十日(大阪・大丸百貨店)
十二月十二日「この一本展」(マツヤサロ)

二、登山施設の改善の促進、その他登山のための適切な事業
六月〜十月下旬上高地に「神河内山荘」を開設
三、山岳遭難の予防上その対策に関する企画および指導
(イ) 七、八月、富士山頂に診療所を開設
(ロ) 五月二十四日、二十五日高山市における全国遭難対策協議會に講師を派遣

四、自然保護活動の推進
自然保護委員會を設け、国立公園内における山岳地の自然保護運動に協力
五、海外登山の企画および指導
(イ) 三、六月、松方三郎隊長以下エベレスト登山を実施、東南稜より二回にわたり登頂に成功、南壁の新ルートより八〇五〇mに達した。
(ロ) 三、六月、東海支部マカール登山
伊藤洋平隊長以下マカール・東南稜より二登に成功
六、機関誌「山岳」会報「山」および「山岳」の発行
(イ) 「山岳」六十五年を三月三十一に発行
(ロ) 会報「山」二八六号〜二九七号の十二回発行
(ハ) 「山日記」一九七一年度版(第三十六輯)を十一月一日発行
七、目的を同じくする外国の団体との情報交換
(イ) 三十方国六十五団体と情報交換

十二月十二日、昭和四十五年度年次晚餐會(平河町マツヤサロ)
十二月十六日、第二六六回小集會「京都山岳会ベルー登山隊報告」講師佐々木徹氏(本会)
十二月二十三日、第二六七回小集會忘年会(本会)
二月二十三日、第二六八回小集會「同志社ドラウグリ登山隊報告」講師今成征三氏(本会)
三月十日、第二六九回小集會「阪大ピーク二十九登山隊報告」講師住吉仙也氏(本会)
(ロ) 講習會、講演會
十一月十日、フランス登山学校コンタミニス氏講演會(朝日講堂)
十一月十一日、第十一回登山技術講習會机上講演會(本会)
十一月二十二〜二十四日、第十一回登山技術講習會(富士山)
その他文部省登山研修所の各種研修會に講師を派遣した。

三、山岳遭難の予防上その対策に関する企画および指導
(イ) 七、八月、富士山頂に診療所を開設
(ロ) 五月二十四日、二十五日高山市における全国遭難対策協議會に講師を派遣

換した。
 (ロ) 韓国山岳会創立二十五周年祝賀式典大森理事らが出席。
 その他

エベレスト登山では八、八〇〇、〇〇〇円の文部省国際スポーツ振興助成金を交付され、また大蔵省指定特定寄付金として四三、三六八、六〇〇〇円の募金をした。

昭和46年度事業計画案

一、登山の指導奨励に必要な集会、研究会、講習会および展覧会等の開催

(イ) 集会

・小集会(報告、講演会ならびにシンポジウム) 本会、年間十回
 ・第二十五回ウェストン祭、上高地(六月五、六日)
 ・有志閑談会、六義園心泉亭(六月十二日)
 ・支部長会議 本会(四月、十二月)
 (ほかに五月宮城支部で現地支部長会議)

・年次晩餐会(十二月四日)
 ・来日外国人登山家との交歓、随時
 (ロ) 研究会
 ・高所登山技術研究会 (未定)
 ・雪崩研究会 (十一月中旬)
 (ハ) 講習会

・登山技術講習会 (十一月)
 ・スキー技術講習会 (一月中旬)
 二、展覧会
 ・年次晩餐会で「この一本展」に準ずる展示を行なう。(十二月四日)
 三、登山施設の改善の促進、その他登山のための適切な事業

・上高地に「神河内山荘」を開設(六月、十月下旬)
 ・「神河内山荘」改築準備(委員会を設置して本格的準備、検討を開始する)
 三、山岳遭難の予防とその対策に関

する企画および指導

・富士山頂に夏山診療所開設(七月、八月)
 ・各大学医学部山岳部による夏山診療所に対する援助(七月、八月)
 四、自然保護活動の推進
 ・自然保護委員会と国立公園内の自然保護運動に協力
 五、海外登山の企画および指導
 ・昭和四十六年プレモンズン、エベレスト国際登山隊に二隊員を派遣
 六、機関誌「山岳」会報および「山日記」その他の図書の刊行
 ・「山岳」第六十六年の発行(三月下旬)
 ・会報「山」十二回発行(月刊)
 ・「山日記」昭和四十七年度版発行(十一月下旬)

・山岳図書交換会など
 七、目的を同じくする国内および国外登山団体との連絡、情報の交換
 ・海外連絡委員会は、世界登山団体と連絡をとり、情報の交換ならびに機関誌の交換を行なう。
 八、その他、目的を達成するために必要な事業を行なう。

故深田久弥氏追悼会

故深田久弥氏追悼会は会員総会に引き続き深田しげ子夫人、長男森太郎氏二男沢二氏をお招きし四月二十四日午後五時からOAG会館で開かれた。正面に遺影を飾り三田会長のあいさつに次いで、最後の茅ヶ岳登山に同行した藤島敏男名誉会員、故郷金沢から出席された山下久男氏、海外登山文獻の研究で故人と親しかった田中榮蔵氏がそれぞれ故人を偲ぶ追悼の言葉を述べられた。

席上には、本会図書室および近藤信行会員によって故人の著作が展示された。なお三田会長より位記、動記、勲章(従五位、勲四等、旭日小綬章)を長男森太郎氏にお渡しした。最後に森太郎氏よりあいさつがあつて、にぎやかな追悼会を終わらせた。

▽出席者 田中榮蔵、望月達夫、名須川 浩、山本朋三郎、広羽 清、野上成男、板倉勝正、平沢亀一郎、沼倉寛二郎、山村正光、瀬名貞利、林和夫、今井友之助、杉浦 一、網蔵志朗、後藤 伝、中河与一、城谷一誠、島田 巽、加藤泰安、荒巻広政、堀田弥一、小原勝郎、小方全弘、坂下心一、村井純一郎、村井喜一、堀内章雄、塚本茂樹、国見利夫、神谷恭、柴田均二、関口周也、今井雄二、山口健児、山下久男、奥山文治、日高信六郎、伊達篤郎、松本義夫、杉並区役所山岳部須浪敏行、斎藤 桂西丸震哉、佐藤金一、織内信彦、藤井連平、高山忠四朗、山下一夫、雁田貞夫、今井嘉道、三田幸夫、小味秀純、川崎精雄、神原 達、川森左智子、漆原知栄子、吉沢一郎、工業英司、石坂久忠、渡部節子、安藤昌宜、笠原藤七、近藤信行、岡 茂雄、薬師義美、山崎安治、田辺主計、岡部みち子、太田 敬、平岡誠一郎、渡辺公平、辰沼広吉、加藤ひろ子、山里寿男、村田恭邦、中川恵實、滝川 清、森 元一、船越好文、横山厚夫、小堀丘平、細川沙多子、藤島敏男、藤島紀子、早川義郎、藤島玄、河野幾雄、城山正三、小倉隆輝、木下是雄、川上忠義、西川益生、西尾久子、武藤 晃、山本久子、高田真哉、小倉重子、春田俊郎、西方芳太郎、風見武秀、石森芳太郎、宮崎英子、大森弘一郎、村井米子、山学同志会星野隆男、吉阪隆正、芳野起夫、鈴木淳平、花崎 洋、川崎吉蔵、横 有恒、松本熊次郎、松方三郎、交野武一、松永敏郎、都筑 竜、鈴

春秋支部長会議

昭和四十六年度春秋支部長会議は四月二十五日午後一時から本会ルームで開かれた。特別に議題を設けず、懇談的に話を進めた。
 来年の現地支部長会議は秋田支部で担当する。本年度から各支部長の旅費は担当支部に寄付する。会報に支部欄を設ける。会員名簿の発行、山日記の調査依頼に返信料をえる。山日記を四十五年度のような無料配布する場合は支部ごとにまとめて発送する。など申し合わせをし、またウェストン祭、支部還付金、高体連登山連盟などについて話し合った。

▽出席者 山本静岡支部長、柴田秋田支部長、伊達宮城支部長、山村山梨支部長代理、石坂富山支部長代理、後藤山形支部長、伊藤福島支部長、藤島越後支部長、塚本信濃支部長、三田会長、藤井、山崎常務理事

五月理事評議員会

(13日午後6時半本会ルーム)
 △出席者 三田会長、成瀬、吉沢副会長、中屋、山崎、藤井、丹部、神原松永、神崎、渡辺、熊谷、坂下、板倉野上、大森各理事、金坂、織田、渡辺望月、田口各評議員、今井監事

議事は、以前に新任の成瀬副会長神崎、渡辺、坂下、板倉各理事の自己紹介あり。
 △議事

・常務理事選任の件 (吉沢)
 昭和四十六年度常務理事をして中屋山崎、藤井、宮下、中島の五氏を選任

したい。この件了承。
 ・理事業務分担任および各種委員会の件
 次の通り各理事の業務分担任を決定しまた各委員会を設けた。(山崎)

中屋(総務、財務、山荘、会員) 山崎(庶務、会報、支部) 藤井(総務) 中島(山岳) 宮下(日山協、学生部) 丹部(日山協) 渡辺(婦人懇談会) 神崎(集会、学生部) 神原(海外連絡) 松永(指導) 坂下(遭対) 熊谷(学生部) 大森(医療) 板倉(自然保護) 村井(日山協、学生部) 野上(図書) 鹿野(山日記) なお会員担当理事を新しく設けることにし中屋理事が当ることになった。

・深田家より寄付金の件 (山崎)
 深田家より各方面への香奠返しのかわりに日本山岳会へ三十万円寄贈の申し出があつた。会としての使途については前回の十万円と合わせ別途考慮する。
 ・支部長会議の件 (山崎)
 四月二十五日本会ルームで開催、現地支部長会議で支部長の旅費を担当支部に寄付するとの申し合わせは、各支部長の意向を尊重し、強制するものではないことを確認し、東京から出席の役員には実費を支給することにした。
 ・ウェストン祭の件 (山崎)

六月五、六日上高地で行なわれるが本年は二十五周年なので東京からも強力なバックアップをし、横、松方、三田、佐藤(久)氏の講演を行なうことにした。また本部から五万円を支出することの件了承。

・上高地山荘の件 (山崎)
 五月十一日、山崎理事が松本へ出張高山評議員と松本営林署に行き、協議の結果、現在の敷地の拡張申請はとり止め、敷地は現状のまま、増改築することにし、上高地の厚生省レンジャーに申請することにした。これに伴ない

設計図も新しく作りなおし、山荘委員会を中心に募金計画を立て準備を進めることにした。

・メダルの件 (藤井)

松方氏が高田博厚氏のデザインによりエベレスト記念メダルを作り、昨年のエベレスト隊員に贈りたい意向があり、その費用を本会で負担してはどうか、この件了承。また同形のプラチナ製のメダルを佐々木徽章店から発売する計画があり日本山岳会名義を使用させてほしいと申し入れがあった。この件については一度藤井理事が松方氏と相談し結論を出すことにする。

・エベレスト国際隊の件 (藤井)

新聞で伝えられているようにいろいろトラブルがあったようだが、本会の植村、伊藤両隊員は南壁要員として活躍している。

・坂本直行氏個展後援の件 (丹部)

六月十八日(二十日)東京日本橋店で開催する。例年通り日本山岳会後援とすることに決定。

・山里氏個展協賛の件 (吉沢)

了承する。

・山岳創刊号復刻版出版の件 (野上)

山岳第一年第一号を五百部復刻版で出版したい。会報で予約を募集する。

・タイプライター購入の件 (野上)

図書室のタイプライターが古くなり使用不能になったので新しく購入したい。代価八万円、この件了承。

・ソ連アルピニスト国際大会の件 (神原)

今秋クリミア半島で国際大会が開かれる。二名招待(モスクワまでの旅費は自弁)されており、新潟大OB二名が希望してきている。日本山岳会入会を条件に派遣することにした。この件了承。

なお、出席評議員で常任評議員を開き常任評議員は、昨年のままとし、こ

れに小原評議員を加えることに決定した。

台湾山岳協会創立25周年大会

中華民國台湾省体育会山岳協会は五月五日午後二時から台北市連雲区小学校講堂で創立二十五周年記念大会ならびに山岳会館落成祝賀会を開いた。来賓として中華民國五輪委員会主席楊森氏謝國城氏らが出席、千四百名が一堂に会し盛会であった。本会からは小味が代表として出席、祝辞を述べ、記念楯およびエベレスト登頂写真集を贈呈した。また日山協からは尾関、高橋両氏、兵庫岳連代表として宮崎会長、川崎理事長が出席した。

なお大会前夜は円山大飯店で台山協主催の歓迎パーティ、周百鍊会長の歓迎パーティ、台北市魚市場登山会の交換パーティと祝賀会が続ぎ、台湾の岳人と交歓し種々お世話になった。

(小味)

昭和四十六年度学生部便り

昭和四十六年度学生部委員校および年間行事予定は次の通り

▽委員校 委員長芝工大(高野) 副委員長専修大(荒井) 同拓大(後藤)

会計明大(和田) 同東洋大(小松山)

同補佐中大(奥川) 集会農大(八幡)

同日大(岡田) 同国学院大(石塚) 同明治学院(伊丹) 書記駒沢大(小野寺)

▽行事予定 五月親睦会(二十日)

六月例会(十七日) 大学山岳部の問題点、部員の確保、新人のトレーニングなど、七月例会(一日)、十月例会、冬山登山について、技術、冬山計画など十一月例会避難対策、冬山計画発表、マラソン大会など、一月リリーダース・キャンプ(一泊、または二泊で合宿する) 新年会。

ルーム日誌(46年4月)

3日(土) 臨時理事会
7日(水) 理事評議員会
13日(火) 学生部委員会
14日(水) 日大出版記念会
20日(火) 学生部委員会
21日(水) 常務理事会
22日(木) 四六年度会計監査
24日(土) 赤坂独逸東亜細亜研究協会 於
25日(日) 支部長会議
26日(月) 学生部総会
27日(火) 図書委員会
28日(水) 日大山岳部集会
エベレスト報告書編集会議

会費未納の方は大至急お納め下さい。

東京、千葉、神奈川、埼玉在住会員は 3000 円、他は 2500 円です。

代表者変更

五四〇六 京都山岳会 代表中井 巖
退会者(46年3月)
四二八六 大久保一男
四四六一 笹川文雄
五〇一六 三井秀夫

藤島越後支部長重傷

越後支部長藤島玄氏は五月十六日岐阜山岳会の日帰り登山を終え帰宅途中午後十時四十五分ごろ新潟市横七番町の市道交差点でタクシーにはねられ頭と左肩を強く打ち五カ月の重傷を負った。生命の危険はないが現在新潟市西堀通七番町長谷川病院に入院治療中である。

あとがき 五月二十二日から二十四日まで宮城支部による第二回現地支部長会議が栗駒山を中心に行なわれた。各地から多数の会員が参加しなかなかの盛況であった。栗駒山や湯の浜温泉はまことにすばらしいところであった。支部長会議とはいっても、全国の会員の懇親会を兼ねているので、その点でも全く有意義な集りである。伊達支部長はじめ宮城支部の各位に大変お世話になった。厚くお礼申し上げます。(山崎)

昭和四十六年六月十日発行

東京都千代田区神田錦町
三二三 向井ビル

発行所 社団法人

日本山岳会

編集代表 山崎 安治

(293) 七四四一

振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂

☆会報製本御引受け☆

製本代 (251号~300号) 金 700 円也

送 料 別 受 け 金 120 円也

ナカバヤシ株式会社

東京店・文京区水道2~15、電話(943) 0311 (代表)

大阪店・都島区相生町7、電話(352) 3491 (代表)

名古屋店・昭和区雪見町1~15、電話(731) 7331 (代表)

工場：大阪工場(堺市)、東京工場(戸田町)

▶背文字その他については往復はがきで
日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい◀

山岳保険に入りましょう!!

- 貯蓄にもなります。
- 万一の場合にはひとの迷惑を軽減します。

御相談は **日本団体生命** へ

角筈支部(専門取扱営業所)

東京都新宿区角筈1の844 新光ビル内

電話 (352) 1556・1557

昭和45年度収支決算表

自昭和45年4月1日
至昭和46年3月31日

(単位円)

収 入		支 出	
科 目	予 算	決 算	予算に対する 決算増減(△)
経 常 収 入	6,050,000	8,195,060	2,145,060
入 会 金	900,000	1,060,000	160,000
入 会 費	5,150,000	6,995,060	1,845,060
事 業 収 入	3,000,000	2,835,750	△ 164,250
山 岳 登 山 料	600,000	636,000	36,000
山 岳 報 告 料	250,000	266,400	16,400
山 岳 刊 行 料	500,000	500,000	0
山 岳 刊 行 料	1,600,000	1,357,150	△ 242,850
山 岳 刊 行 料	50,000	76,200	26,200
雑 収 入	320,000	1,648,751	1,328,751
利 子 収 入	20,000	55,292	35,292
他 事 業 収 入	300,000	344,150	44,150
雑 収 入	300,000	1,249,309	949,309
クラブ・タイ勘定		122,921	122,921
エベレスト登山関連収入		2,801,164	2,801,164
一般会計小計	9,370,000	15,603,646	6,233,646
エベレスト登山隊収入	15,000,000	16,181,777	1,181,777
繰 越	6,552,790	6,552,790	0
合 計	30,922,790	38,338,213	7,415,423

移 動 式 踏 台	1	3,158
ス 組 立 用 本 架	1	4,578
電 気 用 機 器	1	2,549
手 機 一 台	1	14,078
複 写 機	1	3,622
	3	15,849
	1	1,956
	1	91,495
合 計		879,166

種 類	冊(枚)数	金 額
洋 書	955	1,823,800
和 書	2,368	1,894,640
地 図	223	79,684
合 計	3,546	3,798,124

20 点 他	500,000
社団法人日本山岳会昭和45年度収支決算表及び財産目録につき、監査致しましたところ其の正確なことを認承致します。	
昭和46年3月31日	監 事 小原勝郎 同 上 今井雄二

昭和46年度収支予算表(案)

(△印前年度比減)

歳 入		歳 出	
科 目	予 算	前年度予算	増 減
経 常 収 入	6,200,000	6,050,000	150,000
入 会 金	900,000	900,000	0
入 会 費	5,300,000	5,150,000	150,000
事 業 収 入	2,700,000	3,000,000	△ 300,000
山 岳 登 山 料	550,000	600,000	△ 50,000
山 岳 報 告 料	200,000	250,000	△ 50,000
山 岳 刊 行 料	500,000	500,000	0
山 岳 刊 行 料	1,400,000	1,600,000	△ 200,000
山 岳 刊 行 料	50,000	50,000	0
雑 収 入	575,000	320,000	255,000
利 子 収 入	200,000	20,000	180,000
他 事 業 収 入	45,000	0	45,000
雑 収 入	10,000	0	10,000
エベレスト登山隊収入	320,000	300,000	20,000
前 年 度 繰 越	0	15,000,000	△15,000,000
合 計	9,475,000	24,370,000	△14,895,000
運 営 管 理 費	5,956,000	5,134,000	822,000
手 文 印 具 費	1,900,000	1,540,000	360,000
文 具 費	200,000	150,000	50,000
印 刷 費	200,000	200,000	0

支 出		予 算	
科 目	予 算	決 算	予算に対する 決算増減(△)
運 営 管 理 費	5,134,000	5,861,600	727,600
手 文 印 具 費	1,540,000	1,906,600	366,600
文 具 費	150,000	221,280	71,280
印 刷 費	200,000	198,423	△ 157
通 信 費	290,000	398,260	106,260
交 通 費	1,000,000	1,086,198	86,198
家 保 費	1,190,000	1,189,728	△ 272
諸 税 金	21,000	21,000	0
光 電 費	70,000	40,350	△ 29,650
電 話 料	13,000	54,440	41,440
電 報 料	80,000	165,762	85,762
電 報 料	100,000	111,374	11,374
電 報 料	50,000	46,200	△ 3,800
電 報 料	50,000	92,179	42,179
電 報 料	100,000	145,350	45,350
電 報 料	130,000	64,963	△ 65,037
電 報 料	50,000	68,485	18,485
電 報 料	100,000	52,000	△ 48,000
事 業 費	4,680,000	7,357,515	2,677,515
山 岳 登 山 料	2,800,000	1,007,448	57,448
山 岳 報 告 料	150,000	5,162,795	2,362,795
山 岳 刊 行 料	50,000	139,930	△ 10,070
山 岳 刊 行 料	130,000	0	△ 130,000
山 岳 刊 行 料	300,000	0	△ 300,000
山 岳 刊 行 料	150,000	160,820	10,820
山 岳 刊 行 料	150,000	432,522	282,522
山 岳 刊 行 料	150,000	404,000	404,000
エベレスト登山隊収入		1,082,957	1,082,957
一般会計小計	9,814,000	14,302,072	4,488,072
エベレスト登山隊収入	15,000,000	17,173,564	2,173,564
繰 越	150,000		△ 150,000
合 計	30,922,790	38,338,213	7,415,423

資産総額 18,639,867円

1. 基本財産 100,000

1. 運用財産 18,539,867

内訳 1. 基本財産

種 類 預 入 先 金 額

貸付信託日本信託銀行 100,000

1. 運用財産

1) 現金及預貯金

種 類 預 入 先 金 額

現金 36,115

普通預金 八十二銀行 松本支店 71,213

東京銀行 本 店 25,670

協和銀行 神田支店 821,291

協和銀行 神田支店 2,286,528

協和銀行 神田支店 49,587

協和銀行 神田支店 3,360,000

協和銀行 神田支店 140,000

協和銀行 神田支店 72,173

協和銀行 神田支店 6,000,000

計 12,862,577

【参考】

1. 終身会費 500,000 を含む

(定期預金 360,000, 積立預金 140,000)

2. エベレスト登山関連 2,339,672 を含む

財 産 目 録

(昭和46年3月31日現在)

(単位円)

通 信 費	400,000	290,000	110,000
交 通 費	1,100,000	1,000,000	100,000
家 保 費	1,190,000	1,190,000	0
諸 税 金	21,000	21,000	0
光 電 費	40,000	70,000	△ 30,000
電 話 料	55,000	13,000	42,000
電 報 料	270,000	80,000	190,000
電 報 料	80,000	100,000	△ 20,000
電 報 料	50,000	50,000	0
電 報 料	50,000	50,000	0
電 報 料	120,000	100,000	20,000
電 報 料	120,000	130,000	△ 10,000
電 報 料	60,000	50,000	10,000
電 報 料	100,000	100,000	0
事 業 費	5,370,000	4,680,000	690,000
山 岳 登 山 料	1,000,000	950,000	50,000
山 岳 報 告 料	3,300,000	2,800,000	500,000
山 岳 刊 行 料	150,000	150,000	0
山 岳 刊 行 料	100,000	50,000	△ 50,000
山 岳 刊 行 料	100,000	130,000	30,000
山 岳 刊 行 料	400,000	300,000	100,000
山 岳 刊 行 料	160,000	150,000	10,000
山 岳 刊 行 料	150,000	150,000	0
山 岳 刊 行 料	10,000	0	10,000
エベレスト登山隊収入	0	15,000,000	△15,000,000
一般会計小計	11,326,000	24,814,000	△13,488,000
エベレスト登山隊収入	300,000	150,000	150,000
繰 越	4,711,577	5,958,790	△ 1,247,213
合 計	16,337,577	30,922,790	△14,585,213

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

森林・草原・氷河

加藤泰安著

＜A 5判482頁＞定価1,500円

すこし昔の話

初見一雄著

＜四六判400頁＞定価1,200円

遠い山・近い山

望月達夫著

＜B 6判334頁＞定価960円

山の古典と共に

大島堅造著

＜四六判280頁＞定価1,500円

雪山・藪山

川崎精雄著

＜A 5変型判340頁＞定価1,200円

雪原の足あと

坂本直行著

＜B 5判206頁＞定価2,800円

40年のキャリアをもつ編集と内容。

赤いカバーでおなじみの……………

山日記 1971年版

日本山岳会編

＜A 6判400頁＞定価750円

山 岳

日本山岳会編

＜A 5判＞

64年 2,000円
63年 2,200円
62年 2,000円
61年 1,800円
60年 1,500円

国立公園カレンダー

国立公園協会編

＜A 5判リング綴り＞定価960円

屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編

＜B 6判202頁＞定価480円

山で唄う歌1集・2集

戸野昭・朝倉宏編

＜A 6判126頁＞1集240円・2集280円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著

＜菊判584頁＞定価2,500円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖

＜A 変型208頁＞定価3,600円

アンナプルナ日記

京都大学学士山岳会編

＜A 12取変型判170頁＞定価1,200円

登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編

＜A 5判350頁＞定価900円

キンヤンキッシュ1965

東京大学カラコルム遠征隊編

＜B 5変型判220頁＞定価3,000円

南極新聞1956～7年

南極研究会編

＜B 5判横トジ＞定価600円

登山・スキー用具専門店

山の店

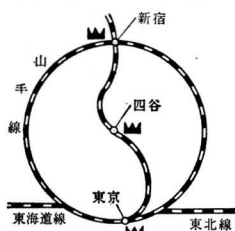
大阪市北区梅ヶ枝町101

TEL. 06(362)5736

●買いやすい
山の店

●北へ来たら
山の店

●フレッシュな
山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432・1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560・8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番

なるべく なんにも
持たない方がいい
けど、もし、どうも
要するものがある、
なにしろ人間ですから
そして、登山ですから
どうしても必要なもの
をここに置いてある
主責任はもっています

かたるぐシンテイ
でんや 281-8456
中央区・八重洲4丁目

秀山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1

PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘



東京店・中央区銀座2-4-5 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座2-4-4 (561)0966 スキー店
大阪店・北区曽根崎上一丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1-4 (28) 3440